

アルケイアー記録・情報・歴史
第五号 二〇一一年三月 一二九―一四五頁
南山大学史料室

博物館実習における大学史展示の実践

岡田昌也

A Practice of University History Exhibition in
Museum Practice Class

OKADA Masaya

archeia: documents, information and history

No.5 March, 2011 pp.129-145

Nanzan University Archives

博物館実習における大学史展示の実践

岡田昌也

はじめに

南山大学人類学博物館において二〇一〇年二月一日から一五日にかけて「Nanzan@69」私たちの知らない学生運動」が展示された。これは、南山大学学芸員養成課程における二〇一〇年度博物館実習Ⅰ（担当 永井英治准教授）の大学史班が製作した展示である。

私は本実習のT A（ティーチングアシスタント）として、授業補佐をしていく中で、大学史班とテーマ設定の段階から関わる事となった。大学史班が扱ったテーマは、南山大学の学生運動である。私はメンバーの傍らで、大学史班が展示を作り上げていく様子を見ていたが、その過程で、メンバー達が学生運動に対して、どのような興味や意識を持ち、それが実際の展示にどのように表れるのか考えてきた。

展示の記録の必要性と、現代の大学生が学生運動に対してどのような関心を持つのか考えるべきだと思い、本稿を執筆した。

一 展示概要

博物館実習1は春期・秋期を通して行われる授業で、学芸員養成課程の最終段階として位置づけられ、単位を取らずれば、学芸員資格を得ることができる。南山大学の博物館実習の特色として、構内に人類学博物館があり、自前の施設を利用して実習を行うことが出来る点が挙げられる。

博物館実習1では博物館に収蔵されている中でも主に紙媒体（古文書、古地図、古写真など）を利用して、実際に展示作業を行っている。学生は春期に紙媒体の扱いや調査方法を学び、同時に展示テーマを練り上げていく。秋期に入ると展示準備の作業に入り、一二月後半に前半グループが、一二月の中頃に後半グループが展示を行った。

展示内容は以下の通りである。

エントランス

大学史班は人類学博物館ロビーを展示スペースとした。博物館入口入って正面に展示ポスターを貼ったパーテーションを設置し、その右横を入口としている。（図1・2）

展示

展示入口を入ると、ポスターが貼ってあるものを含め、七枚のパーテーションを使用して展示スペースを区切っている。（七枚中三枚を隣接展示と共用）

展示は「1. はじめに」「2. Nanzan@68-69」「3. Nanzan@70-71」「4. おわりに」という順に進む。主に、写真や記事と説明文で構成される。

「1. はじめに」では、高度経済成長と大学の「大衆化」を背景として、学生達の異議申し立てと運動の激化を



図1 エントランス

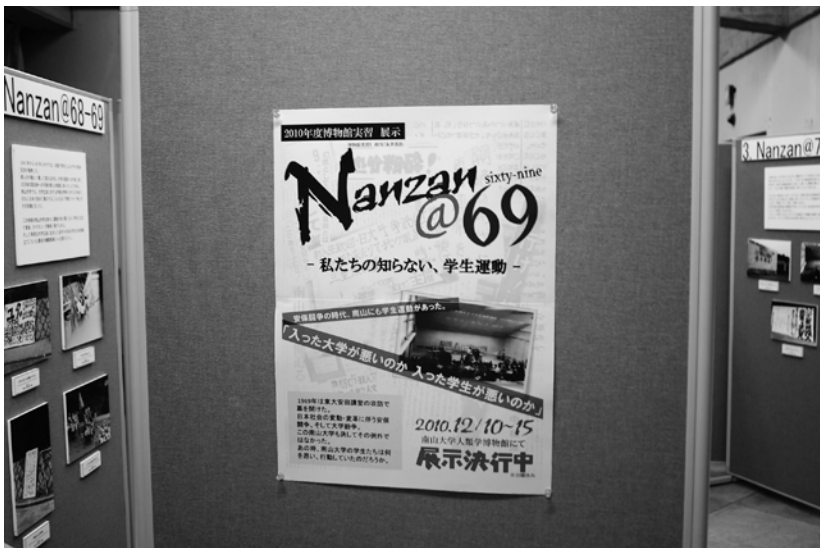


図2 ポスター



図3 「1. はじめに」「2. Nanzan@68—69」



図4 「3. Nanzan@70—71」「4. おわりに」

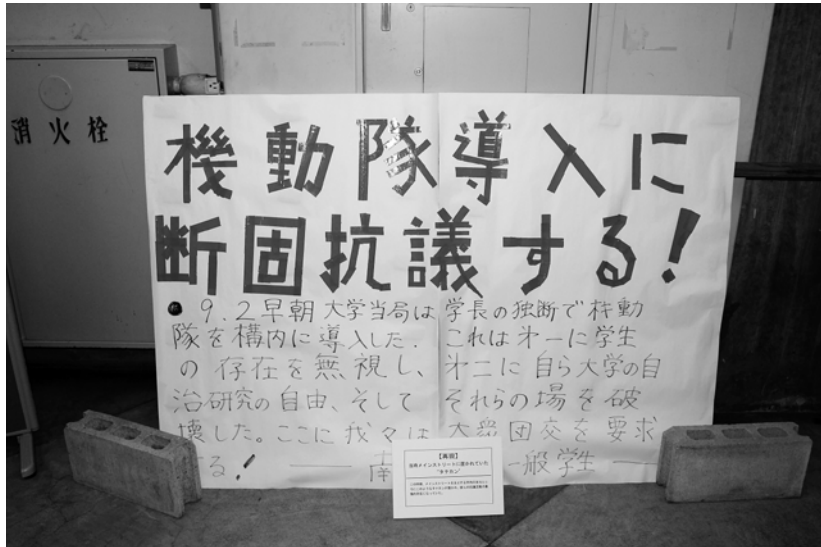


図5 再現された立て看板（タテカン）

説明する。また「南山大学の学生たちは何を思い、行動していたのだろうか。今自分のいるこの場所のことを、少し考えてみてほしい。」という文で展示での導入としている。

（図3）

「2. Nanzan@68-69」では、全国の大学での運動の高まりと、大学立法や学費スライド制に反対する中で、南山大学での二回の機動隊突入について説明する。当時の過激な表現の立て看板（タテカン）や機動隊突入時を写した写真が展示されている。（図3）

「3. Nanzan@70-71」では、主に学費スライド制導入反対で起きた説明会の妨害、中止について、そしてそのころをピークとして以後の運動の鎮静化について説明する。（図4）

「4. おわりに」では、政治色抜きの大学祭や、大学当局の「異議申し立て制度」の導入など大学生活の「平常への復帰」を説明している。（図4）

ビラ

当時配られた広報用のビラが透明の樹脂製ケースに展示

はじめに

1960年代。高度経済成長と相まって到来した大学「大衆化」時代。学生達は大学運営や政治へ真摯を唱えるために運動を起こすようになり、それはやがて学生紛争へと発展していった。彼らは何を考え、何のために運動を起こしたのだろうか。

Nanzan@68-69

日本全国で学生紛争が頻発したこの時期の南山大学では、大学立法に反対した約30名の学生達が学生委員会を占拠した。学生側の約10倍の数の約300名もの機動隊が導入され、新聞でも大きく取り上げられた。

Nanzan@70-71

全国初の試みとなる学費スライド制導入に始まり、2度目の機動隊導入となる学長教務事件、「カムフラッシュヤブー(葉まれ)」を合い言葉にした南山祭と1つ3つの出来事があった。南山大学ではこの時期が学生紛争の最盛期と言える。

おわりに

学長教務事件に関与した学生の処分が1972年に決定し、翌年には学費改定の説明会が平穏に行われた。反代々木系の学生は秩序違反行為を続けたが、1974年には学生紛争はほぼなくなり、「平常への復帰」が達成された。



用語解説

・大学立法・

…期限5年の時限立法で、国立大学を主対象に、紛争状態にある大学の自主的收拾のために学長の責務を明確にし、場合によっては教育休止・停止をも実施した法律。

・学費スライド制・

…人事院勧告による国家公務員の給与改善率を上限として、毎年学費を改定する学費制度。それまでは学費固定制が取られていた。

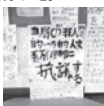


・学長監禁事件・

…1971年6月16日、反代々木系学生らが南山大学本館会議室に乱入後、沼澤喜市学長を軟禁状態にして大衆団交を要求した事件。

・反代々木・

…日本共産党本部が代々木駅近くにあることから「非日本共産党」を指し、特に学生運動では「新左翼」(学生による急進的革命的志向者)系勢力のこと。



コラム

探すNanzan@69

学生紛争は、なにも古い写真の中だけの出来事ではない。

例えばこの写真は、現在のG棟地下を撮影したものである。白い壁に、消しきれなかった大きな落書きを今なおはっきりと確認できる。

博物館を出たら、今も学内に残る当時の爪跡を探してみよう。

生々しい痕跡にきつと、学生たちの思いをより身近に感じることができるはずだ。



読むNanzan@69

・『HOMIS DIGNITATI 1932-2007』,南山学園創立75周年記念誌,2007年11月発行。

・『私の中の南山』,南山大学,2001年3月発行。

2010年度博物館実習 展示



2010.12/10-15

※日曜休み

南山大学
人類学博物館1階ロビー

図6 リーフレット

されている。内容は学内への機動隊導入を非難するもの。ピラを重ねるようにして展示しており、見せ方を工夫している。

立て看板（タテカン）

当時実際に学生によって設置されていた立て看板（タテカン）がメンバーによって再現されている。赤文字はビニールテープ、黒文字は油性ペンによって書かれている。内容は史料室で見つけた写真から採られている。（図5）
リーフレット

リーフレットは主に南山大学名古屋キャンパス内に残る一九六〇年代後半から一九七〇年代の名残を残す場所をキャンパスの地図に載せて紹介している。（図6）

二 大学史展示の実践、および試行錯誤

ここでは、大学史班がどのような過程を経て展示を作成したかTAとしての観点から述べていく。

博物館実習1では、春期のはじめに、古文書、古地図、古写真をそれぞれ一授業ごとに触れる機会を設けてあり、そこから大まかながら扱いたい、展示したいものを選んでいく。そして古文書を扱うグループ、古地図を扱うグループ、とグループ分けを行っている。

そのグループ分けで、メンバー数に偏りが起こった。そこで私は永井先生に大学史料室に保管されている南山大
学に関する史料を扱うグループを提案した。先生は史料の存在や、時代背景を混ぜながら説明し、学生の反応を見ると、数人がグループを移動し、大学史班として集まった。

メンバーは五名。六月一七日の企画中間発表に向け、大学史料室で史料の閲覧を毎週行なった。ちなみにこの時点では、学生紛争を扱う班として集まった訳ではなく、大学に関する史料全般に目を通していた。実際に六月三日時点のテーマ案としては、創立の歴史、学生紛争、学生生活の変化、大学祭、部活動、建物の変化、宗教行事などが挙げられている。

閲覧した史料を見た感想から、二つのテーマ案に絞り込んだ。メンバーは展示目的を「過去と現在という側面から展示を行うことによって、南山大学の学生により自分の大学の歴史を知ってもらい、より大学に親しみと愛着を持ってもらうこと。そのため、学生により興味を持ってもらえる展示を目指す」と設定し、それに沿った案となった。一つは南山大学における学生運動を取り上げる案である。当時の時代背景や運動の目的、当時の学生の様子などを史料室の史料から展示するものである。もう一つは学生生活の変遷を取り上げる案である。現在のキャンパスの様子、具体的には授業風景や学食、行事、校舎などを四〇年ほど前と比較するものである。

二つのテーマ案をどうするか、メンバー間で両案の検討がなされ、史料の多さや、テーマの与えるインパクトから学生運動を取り上げる案を中心に考えていくことになった。

私からも、メンバー達が最も興味を示しているのは、学生運動の史料に見えた。残されている史料は写真や、ビラ、大学側の対応関係の文書などである。メンバーの誰もが学生運動を見たこともないし、それに参加したこともない。自分たちの良く知るキャンパス内で、ほぼ同じ年代の学生達が、徒党を組み、学長の監禁にまで至っていたという事態を、写真や史料から初めて知り、衝撃を受けたのだと思う。また、名古屋キャンパス内に当時の落書きが残っている事なども知った。この頃のメンバー達は新しい資料や、事実に出会う度に驚きとともに、興味深く調べていた。

ただ、余りに現在の学生と様子が違うことに戸惑っているようにも見えた。写真をはじめ、残っている史料に過激な内容が多く、学生たち全てがこのような運動に参加していたのかという疑問も生じていた。もう一つのテーマとして学生生活の変遷を取り上げた事も、メンバーが「当時の学生たちと、自分たちとの間に何かつながりを見いだせないか」と考えている事の表れに思えた。

七月に入り、大学史料室内の学生運動に関する写真や、ビラ、書類などから展示に利用出来るようなもののピックアップやどのような展示にしていこうかという検討が行われていった。そこからの具体的な展示内容の検討は比較的順調に進んでいるように見えた。夏季休暇に入る前には大まかな展示内容は固まっていた。ここでも学生運動の主な内容の説明をどうするか、二案出ている。「案一 A学生側と教員側の視点 B今との比較 C参加／不参加の学生 Dスライド制について」「案二 一初めに 二最盛期 三終息」とし、学生運動を数種類の切り口から展示する案と、時系列ごとに展示して行く案である。どちらも一長一短に思えるが、メンバー達は学生に向けての分かりやすさを目指してか、案二で進行した。

夏季休暇中には、九月九日に学外授業として、京都大学文学書館歴史展示室の見学を行っている。ここでは京都大学の大学史を展示している。南山大学と異なり、戦前から歴史があるため、戦後の大学史に割かれている展示は多くないが、関西における激しい運動の現場であったことから、当時の映像を用いるなどして力を入れて展示していた。メンバー達は展示を見学し、その後京都大学文学書館准教授の西山伸先生に、学生運動を始め大学史を展示について質問する機会を得た。メンバーはこれまで調べてきた中で疑問に感じていたことや、感じていたことをぶつけた。西山先生は京都大学での例を挙げながら、大学史を展示する事の難しさや在り方について説明し、メンバー達はこれらから多く考える機会を得た。

また、夏季休暇中には、展示の目玉を設けようということで、当時のタテカンを再現したものを製作していた。秋期、一〇月一四日に展示企画計画書を作成、提出している。この中で、展示タイトル、展示目的、概要、展示資料、広報活動について詳しく決められ、展示製作の基礎はほぼ固まった。

展示目的の項では、メンバーがどのような観点から展示を製作するか熱く述べられているので引用する。

「過去の歴史は、決して断片ではなく現在へと繋がっているものである。現代の私たちが過去を学ぶことは、これから先の自身へといかしようものとなる。南山大学の学生である私たちはこの大学の歴史、どのように今の学生生活が成立してきたかについて知ることで、得られるものがあるのではないか。私たちとは違う部分も、同じ部分も、そこには多く見つけられるはずである。当時の学生達の生活や考え方を知ること、良い意味でも悪い意味でも有意義な学生生活のヒントにしてもらいたい。また今となっては当時大学で何が起きたのか、何が変わったのか知らない学生が大多数である。彼らにとって身近なテーマの展示を行うことで、これまで博物館を訪れたことのない学生にもアプローチを行っていきたいと思う。そして、南山大学で学ぶこと／学んでいる自分自身を見つめなおし考えてもらうことを展示の目的としたと思う。」（傍線原文）

ここで注目されるのは、メッセージ性の強調である。そのメッセージは南山大学の学生に向けられるものである。同じ企画書内では見学対象者を南山大学の学生、教職員、大学に関わりのある人々としているが、この展示目的では特に学生に対しての展示であるという意識がメンバー達にあったことが伺える。このことについては次章での展示に対する評価でも触れる。

その後は、各パネル、リーフレット、ポスター作製など、順調に作業が進み、一二月九日に展示作業本番、一〇日から一五日にかけて展示が無事行われた。(図6)

四 展示に対する評価

(一) 論評会での批判

二〇一一年一月二三日、博物館実習1の授業内で、学生同士による展示の論評会が行われた。大学史班に対しては、意欲的な展示内容を評価しているようだったが、幾つかの批判もあった。主なものは、展示の導線について、パネルの文章についてである。

導線に対する批判はタテカンの位置が展示を正面から見て右側に配置されているために順番に「2. Nanzan @68-69」まで見たあとに、見るべきなのか、入口に入ってすぐに見るべきなのか迷ったというものである。大学史班側は、タテカンを展示から独立した存在として扱ってほしいという回答をした。導線の若干の分かりにくさは私も感じた。次の筆者の展示評価で詳しく述べる。

パネルの文章については「1. はじめに」で「南山大学の学生たちは何を思い、行動していたのだろうか。今自分のいるこの場所のことを、少し考えてみてほしい。(傍線筆者)」という部分が「展示を見ている中で、見学者がこれを強制されているように感じる」という批判であった。大学史班側も想定していなかったようだが、そのような見方もあり得ることを否定せず、受け止めていた。

(二) 筆者の展示評価

論評会での批判に対する私の考えを述べる。

まず導線について述べる。タテカンの位置も関係するが、「2. Nanzan@68-69」から「3. Nan

zan@70-71」に移る際にはUターンして「3」を見つけなければならぬためであろう。狭い展示スペースなので制約が存在する。しかし、展示内容のみでなく、空間利用の把握も企画の早い段階でしておくべきだと感ずる。

パネルの文章については、私もこの批判に、「そのような見方も存在するのか」と驚いたが、後にあり得ない批判ではないと考えるようになった。前章で引用した今回の展示目的からも伝わるように、当初から現代の学生に伝えたいという強いメッセージを持った展示であった。おそらく、考古学や歴史学等どのような展示においても、このように見てほしいというメッセージは存在するだろう。しかし、今回のテーマが現代史で、また展示対象に政治的要素があった展示であったため、見学者を敏感にさせ、そのような批判を想起させた可能性はあるだろう。現代史や政治的なテーマの展示をする際に浮かび上がる難しさを実感した。

もちろん、今回の展示者達には特定の政治的な意図は無い。むしろ京都大学大学文書館での学生運動の展示（端的な説明と映像に留めている。）に強い影響を受けたか、展示は、学生側・大学側どちらにも偏らず、公平な視点を目指したものとなった。しかし、「南山大学の学生は……少し考えてみてほしい。」の文章は、無意識にはあるが、現代の学生が展示を見る際に、一九六〇年代後半～一九七〇年代前半の学生側の視点になってしまいう可能性を持つているのではと考える。

「学生側の視点」は、他でもみられる。

展示内で学生運動を時系列にして追う事を採用したため、どうしても学生の起こした事件に注目が集まる。展示内では「学生側の視点」を採ることは言明されていないし、敢えて強調されることも無い。しかし、学生側と対立した大学側の視点（異議申し立て制度）があまり示されないため、「学生側の視点」が浮かび上がってくるのだろう。

大学生が展示を作るのだから学生側の視点が浮かび上がるのは幾分仕方ない事と考えられるのだが、これは公平で中立な展示を目指していても、展示する側の立場を多かれ少なかれ反映してしまう事を示していると思った。そのような展示を目指すにはどうすれば良いのか考えるところである。

私は大学史班の展示においてリーフレットが有効に利用されたと考えている。リーフレットには地図を載せ、展示を見た後に、キャンパスを歩いてもらうという方法は紙媒体を扱う実習でありながら、場所や建物が記憶した歴史を探ることも目指している。テーマとしたフィールドを展示場所のすぐ近くに持つ利点を生かした装置になっており、展示目的である過去と現在とのつながりを実際に体感するものになったと思う。

おわりに

最後に、現代の大学生が一九六〇年代後半から一九七〇年代前半の学生運動について展示を行った意義について考える。

南山大学で起こった学生運動については『南山大学五十年史』や『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』などで詳しく経緯が記述され、当時の様相を伝えている。大学にとっては誇るべき歴史ではなかったにも拘わらず、このように伝えていくという事は、有りがたい事であると思う。しかし、現代の学生の内、南山大学で学生運動が行われていたことを知る者は、ほぼ皆無と言って良いと思う。おそらく、学生の中には学生運動というもの存在や、どのような出来事だったのか分かっていない人も少ないと思われる。大学のみならず、社会全体で意図的か否かは別にして、負の歴史として語られる機会が無かったためであろう。同じ一九六〇年代にでも、暮らしや

子どもたちの文化等の庶民生活をテーマにした展示が多く作られ、内容が一九六〇年代を古き良き時代としてノスタルジックに語られるものである事とは対照的である。そういった中で、現代の大学生が学生運動を調べ、展示するという事は、ようやく冷静に、歴史の一頁として捉えられるようになった現れだと思う。

今回の大学史班は、最初は様々な学生運動関連の史料を現在の学生生活との大きな違いから驚いているのみだったが、背景を理解し、出来る限り公平な目で史料を見ていった事で、過去の大学と現代の大学との繋がりを見出しつつあった。それは自分たちが良く知っている場所であることも重なり、時にとても強く「過去の歴史は、決して断片ではなく現在へと繋がっている」ということを意識させるものであった。この辺りに戦後の大学史を展示する意義があるのではないかと考える。

〔使用資料〕

〔二〇一〇年度 博物館実習1 大学史班 実習ノート〕

〔博物館実習1 大学史班 展示企画書〕

〔六月一七日博物館実習中間発表 大学史グループ〕

〔参考文献〕

南山大学五〇年史作成小委員会編『南山大学五十年史』南山大学、二〇〇一年

南山学園創立75周年記念誌編纂委員会編『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』南山学園、二〇〇七年

〔付記〕

二〇一〇年度博物館実習1大学史班の御好意により、授業内で作成した資料の使用をはじめ、本文の執筆にご協力いただきありがとうございました。感謝いたします。